

2010 年度 6 月度の総括

すべての「進学塾ビッグバン」に集う人々へ

菅政権発足から 7 日目の 14 日夜、新宿ゴールデン街。「全共斗」と書かれた黒や灰色のヘルメットが並ぶ店で、酔客の政談は翌日の午前 3 時まで続いた。中核派の OB だという常連の男性 (61) は「ヘルメットもかぶらなかった菅に何が分かる。しかし、自民政権とは違う」と同世代への屈折した期待を口にした。首相、菅直人 (63) は前任の鳩山由紀夫 (63) と同い年。菅は鳩山政権の 11 閣僚を再任した。それなのに前政権とかなり趣が異なるのは官房長官、仙石由人 (64) のおかげだろう。直人と由人 2 人は 1968 年前後のベトナム反戦運動、仏 5 月革命や東大紛争など「同じ時代に同じ空気を吸って生きてきた」(仙石) 68 年世代だ。当時東工大のノンセクトグループで学生運動の周縁にいた菅の目に、東大全共闘で活動する仙石らはまぶしく映ったに違いない。(一方) 仙石は政治家として菅を仰ぎ見てきた。初当選は菅の 80 年より 10 年遅い 90 年。92 年に菅と現参院議長の江田五月 (69) がつくった政策集団「シリウス」に加わるが、93 年に落選した。社会党から民主党にくら替えして再選を果たす 96 年に菅はすでに党代表だった。それでも菅は「女房役」に迷わず仙石を選んだ。菅にとって仙石は「煙たい存在」だが、前幹事長、小沢一郎 (68) の影響力を遮る「煙幕」に適任だった。「市民自治に権力は必要」と言い切る菅には現実主義者の素地があった。長期政権のために官僚批判の看板も下ろす。...日本の統治構造を変える、という思いには、学生運動の残り香が漂う。それだけに、時代遅れの感もある。

6 月 22 日付日経新聞コラム「政権 第 9 部転向 遅れて来た 68 年世代」

5 月度の総括で引用した吉本隆明の「共同幻想論」は、「国家とは所詮幻想にすぎない」ことを柳田国男の「遠野物語」の中の民話譚を引きながら“証明”したものでした。当時それほど「国家」とは遠くはるかなもので、「国家権力」とは不敗で鉄壁のものでした。

70 年代、80 年代の左翼運動の主流は、かの有名な「あさま山荘事件」や、連合赤軍内部における仲間殺しから始まり、中核派 v s 革マル派、革労協 v s 革マル派という新左翼党派どうしの殺し合い、いわゆる内ゲバに明け暮れました。内ゲバとは両派が偶発的に遭遇して殺し合いに発展するというものではありません。ターゲットとなる相手党派のある個人を何カ月も何年もかけて調べ上げ、本人とは面識もなければ、直接的な敵意すらない連中による「殺人部隊」が結成され、満を持して“攻撃”に向かうのです。それは相手が通勤途中であったり、自宅で就寝中であつたり、でしたが、武器はおもに鉄パイプとバールで、何とも原始的な“撲殺”を旨とするものでした。この間、奇妙なことが起こっていました。中核派、革労協両派を敵に回していた革マル派は、「自分たちを殺しに来るのは、ブクロ (中核派の蔑称) でも、青虫 (革労協の蔑称) でもなく、国家権力が放った謀略部隊なのだ、自分たちは謀略部隊にやられているんだ。ブクロや青虫は、その追認集団に過ぎ

ないんだ」と唱えはじめたのです。これは、革マル派の大將が、盲目のカリスマ議長：黒田寛一（故人）であり、彼が描く「不敗の国家権力」観が色濃く投影されたものだと思います。

私たちも、デモや学生集会に参加したり、その現場を映すテレビ中継を見ると、青いジュラルミンの盾を前に置いて無表情ですら一っと居並ぶ青い戦闘服を着た機動隊がとても威圧的で、「ああ、国家権力というものはあの向こうにある、手を届かせようとするもんならたちどころにやられてしまうものなんだろうな。」などと感じたものです。革マル派の連中もそう思ったに違いありません。ましてや、実際現場に行ったことさえないであろう盲目のカリスマ議長が描き出す幻想としての国家観と、彼を奉ずる革マル派 6000 人の国家観は、吉本隆明が「共同幻想論」で、資料を駆使し言葉を尽くし、周到に国家を解体しようとした「不敗で堅牢な国家」観と同じメンタリティであったと言えましょう。

菅直人や仙石由人は、その時代の生き残りです。彼らは、運よく内ゲバに巻き込まれることなく、お決まりの安直な「市民運動」に移行して生きながらえた結果、これまた運よく国政の場に打って出ることができました。彼らは民主党の幹部となり、やがて先の衆議院選挙を通じ、遂に、遠いはるかな地平線のかなたにあった「国家権力」を手に入れたのです。機動隊に殴られる側ではなく、機動隊を手足のよう使える側に立てたのです。そして、夫婦別姓、外国人地方参政権など、この国の伝統、文化、国家体制をも揺るがせかねないとも言われている法案を次々と打ち出してきたのです。絶対に「死刑」にハンコを押さない法務大臣千葉景子は、中核派シンパと言われています。

彼ら心優しい、弱者の常に味方であった左翼の人々は、ひとまず「友愛」を説くお金持ちのおぼっちゃん鳩山由紀夫をいただき、田中角栄の金権政治を継承する小沢一郎に閉口しながら、着々と「国家権力」のトップに立つ機会を窺うようになりました。

そして、ついに鳩山首相が権力の座に就くこと 8 カ月にして、小沢幹事長をともなって心中＝辞任するという挙に出た結果、菅直人は、同僚の仙石、配下の枝野を伴って、「国家権力」の座に就いたのです。

吉本隆明の時代に青春を過ごし、内ゲバの時代を辛うじてやり過ごし、バブル経済の興隆と破綻の時代を経て、小泉内閣の時代に一つのピークを迎えた自民党が、その後続く弱小内閣ですってんてんに落ちぶれた後、菅直人は、民主党の副代表から、ついに首相へと登りつめたのです。

彼らは機動隊の向こうにあった「国家権力」を手にしたあと、この国をどのように導こうというのでしょうか。

私が、菅直人の同僚：仙石由人官房長官に危惧するのは、医師不足の解消方法の一つとして、外国、とくに中国や韓国からプロの医師を受け入れて医師の数を増やそうという意向を持っていることです。これは、医学部の数を増やせとか、医学部定員を増やせ、という議論以上にとっても危険なことだと思います。韓国では歯科医の数が足りなくて、医師の数が余ってきていると言われています。実際韓国の大学入試では、歯学部の方が医学部

より難しく、日本と逆の現象になっています。もし日本で、外国人地方参政権を許すなら、韓国人や中国人の意向に沿った法案が通り、悪い言葉で言う日本の医師の既得権が大きく損なわれることは間違いありません。仙石はいまだ野党の「甘さ」が抜けきらず、この国の真の「国益」とは何なのかを考えるにあたり、与党=権力の座にある立場としての思考のパラダイムを組み替える能力と意思を持ちえていないのです。医師になる日本の若者たちは、正しく日本で納税の義務を果たし、日本の教育を受け、それぞれの地域の人々から大いなるものを託されて猛勉強を何年も積み重ねて来た、「国益」に最も与るべき人々です。その人々の将来を、外国で納税してきた外国人の医師たちに奪わせてはなりません。

私はこの国で医師になろうとする医学部受験生を預かる立場から、日本の医師の既得権を守る責務を感じています。私の大切な医学部受験生たちの医師への道を栄光の星々たちで飾り立てたいと願う私にとって、彼らは最も憎むべき「敵」となるかもしれません。彼らは、また在日の人々にとっても「敵」であることを知っておかねばなりません。在日でありながら、日本の「国益」に背を向けるならば、それは天に唾するようなもので、その災禍はおのれに返ってきます。なぜなら、日本の受験制度の中では、日本に住まう以上、国籍に関係なく一般の日本人と平等に勉強することができ、平等に学歴を付けることができ、平等に医師になれる立場にあるからであり、逆にいえば、いくら民族が同じであろうとも、外国に住む同胞ならば所詮は外国人であるに過ぎない「邪魔者」だからです。私は、どんな外国人よりも、日本で医師になろうとする、日本に住む日本人と在日外国人の利権を守りきらねばならないと思うのです。

私は周りの誰よりも在日外国人とりわけ、在日韓国、朝鮮、中国人の知り合い、友人を多く持っていると自負しています。教え子やそのご両親に多いです。彼らは私にとって、とても大切な人々です。そして刺激的です。30年近くも予備校稼業をしていると、当初は2世、3世の人々だったのが、今では4世、5世の人々に代わってきました。彼らから受ける悩み相談も徐々に変容してきました。昔は「差別された」云々が目立ちましたが、今では、むしろ、親子の考え方の相違、アイデンティティの持ち方に関する「悩み」が目立つようになりました。

「サッカーだと、日本と韓国、どっち応援するの？」と聞くと、「自分は日本、でもオヤジは韓国を応援する。オカンはどっちもどっちって。」と言って笑います。私はこう説明します。「高校野球だと、俺は岐阜県出身なんで岐阜県代表校を応援するが、息子は大阪や近畿勢を応援する。それだけの違いだろう。それを踏まえて、お前、在日親子の問題ぐらい自分で処理せえ。お前ならできるやろ」それで、多くの3世、4世、5世の子は納得してくれます。

マッチ擦るつかのま海に霧深し 身捨つるほどの祖国はありや 寺山修司

高校時代、寺山修司のこの短歌に接した時、私は、なぜか、同じクラスの、朝鮮半島を

祖国に持つ在日の友人をひたすらうらやましいと思い、おそらく普通の日本人である寺山修司もそんな思いで詠んだんだろう、と思いました。1980年前後、予備校講師駆け出しの頃、教え子の大阪朝鮮高校出身の浪人生が祖国北朝鮮に行って帰って来たあと、私のところに土産を持って来て、「先生。やはり祖国は信じられる、と思いました。」とうれしそうに語ったのを思い出します。その時も、「へえ、よかったなあ」と言いながら「祖国」を持つ彼に、不思議な嫉妬を覚えました。

思い返せば、そのころに横田めぐみさんたちは、北朝鮮工作員どもに拉致されていたのです。結局、彼が「信じられる」といった真意を聞くことはできませんでしたが、「拉致問題」発覚後、私は、その部分を情緒的に考えることを辞めなければならないと決意しました。「情緒的に考えることを辞める」とは、「祖国」という魅惑的な響きを持つアポリアに決して捕らわれることなく、事実と、この国の「国益」をのみ「真実」とみなし、それに沿って考える、生きるという意味です。「国益」とは、あくまで日本人と日本に住む在日外国人の利益という意味です。経済に絞って言えば、GNP(=gross national products 国民総生産)ではなく、GDP(=gross domestic products 国内総生産)の方を指すのです。つまり、日本の「国益」に背く者どもすべてを「敵」とみなそうと決意したのです。

私が「外国人地方参政権」に反対なのは、「国益」に忠実な者である証として、せめて生まれつき「日本人」である人、自らの意志で「日本人」となった人だけが、この国の、例えば地方といえども政治の行く末を決定する主体であるべきだ、と考えるからです。「反対」というより、「論議の必要すらし」と考えるものです。

ビッグバンで遅刻する生徒が多かった日の前日はたいていサッカーの試合がありました。私たちも少しそのあたりは甘く対応せざるを得ず、その分、ちゃんと修復しろよ、と言うにとどめました。稠密にしつらえられたビッグバンのカリキュラムも、少しは遊びの部分を計算に入れているからです。伸びっぱなしのゴムではやがて切れてしまうこともあり得ます。そのさじ加減は永遠の課題ですが、全体としては、まあまあ何とかやり遂げたに近い6月だった、という評価を与えたいところです。

WCでは周知のように日本は16強まで行きました。8強進出を賭けたパラグアイ戦はPK戦で、惜しくも敗退したわけですが、日本がとてもいい祖国だと感じたのは、一つに、PKを外した駒野選手を責める声がほとんど皆無だったことと、GKの川島選手が、インタビューで「日本のために責任を果たすことができました」とサラリと言ったことでした。

1964年、私が小学生の頃、アジアで最初のオリンピックが東京であり、陸上の華と謳われるマラソン競技で、エチオピアのアベベ選手がダントツの一位だったことと並んで、競技場に入ってからデッドヒートの末にイギリスのヒートリー選手に抜かれ、惜しくも三位に終わった日本の円谷選手が一躍国民的ヒーローになったことを記憶しています。そしてその数年後、国民的ヒーローの重圧に耐えかねた円谷選手は、「お母さん、とろろごはん、おいしゅうございました。」という遺書を残して自死したことも鮮明に覚えています。「何

のために走るのか」という彼の死の意味を問うフォークシンガーの歌もヒットしたことも。「日の丸」は当時、それほど重圧だったことを思うと、川島選手のサラリと言ったのけたインタビューでの言葉は、まさに隔世の感がしたと同時に、不思議に鮮烈な印象をもたらしてくれました。それは、ちょっと前の、水泳の北島康介選手の、敢えて「日の丸」だの「日本」だのを言葉にせず、即物的な印象を率直に述べた「チョ 気持ちイイ」という絶唱とも異なる、ひらりと舞うように語られた、かといって決して軽薄な感じも与えない、新しいタイプの「祖国」だったからです。寺山修司の歌をもう一度紐解くならば、今はすでに「身捨つるほどの祖国」などではない代わりに、「身捨つるほどの祖国」であった重みを忘れない「軽み」とでも形容できましようか。恐るべき世代が登場した、という感さえ受けました。

明治時代以来、日本のために戦って死んだ人たちの魂を英霊と言います。靖国神社はそうした英霊を祀る神社です。そこには国籍による差別はありません。日本人も、朝鮮人も中国人も台湾人も英霊である以上、等しく祀られています。戦死ではなかった人はそこに祀られる資格はありません。英霊ではないからです。その靖国神社にゼロ戦などを陳列している遊就館というところがあり、そこに、明日特攻隊として戦死していく運命にある20歳前後の学徒動員兵士の肉声がテープに保存されています。それを聞くと誰しも驚き、慟哭を禁じえません。当然、「お母さん、さようなら」とか、「天皇陛下万歳」とかだと思ったら、全く違います。

「私もインテリの端くれだから、この戦争が負け戦になることは間違いのないことはわかっている。だが、そんなことはどうでもいい。祖国日本が、10対0で負けるか、9対1で負けるか、問題はそこだ。10対0で負けるのと、9対1で負けるのとでは、負け方、終戦後の処理のされ方で大きな違いがある。10対0ならば、祖国は間違いなく消滅するだろう。私は、この負け戦をせめて10対0から9対1にするために、明日死んでいく。何の未練もためらいもない。私は祖国日本が永遠に続くために、死んでいく。」

日本にこんな「祖国」を思う若い魂たちがいたおかげで、川島選手の「軽み」にまで、この国が消滅どころか世界に冠たる成熟を果たすことができたことを心から感謝し、その御霊の安からんことを願います。そして、どうかビッグバンの生徒たちが、みな幸せな医学徒になれる国でありますようにと、等しく願うばかりです。

平成22年6月末日

進学塾ビッグバン 松原好之(文責)